

佐渡米通信

こめへる

2025年 12月号

発行日:2025年12月

発行：佐渡農業協同組合 担当：総務部企画総務課 駒形(葵)
jasadosoumu02@snow.ocn.ne.jp

令和7年産米検査結果の進捗報告

令和7年産コシヒカリの1等米比率は65.5%（11月11日時点）となっており、昨年と比較して10%ほど良い結果となりました。契約数量に対して集荷率は88.1%となっており、天候の影響を著しく受けた昨年、一昨年を除くと令和4年度と同程度となりました。今年度のJA佐渡管内での各地域別の等級比率を分析すると、経営規模の拡大による適期適作が難しくなっていることも伺え、より省力で効率的な管理方法が求められると考えられます。

JA佐渡では令和5年からドローンを活用した管理方法の検証に取り組み始めました。今後、指導会などを通して技術の指導にもより力を入れて参ります。

コシヒカリ1等米比率と集荷率（過去5年間の同月比）					
	令和3年産	令和4年産	令和5年産	令和6年産	令和7年産
1等米比率	90.3%	80.9%	3.1%	53.5%	65.5%
集荷比率	86%	88.2%	78.5%	77.5%	88.1%



等級比率の分析内容について議論をする農産物検査員反省会の様子

佐渡米販売懇談会開催

10月下旬に佐渡米を取り扱っていただいている主要卸の方々を招き、佐渡米販売懇談会を開催しました。JA佐渡から検査状況と集荷状況について説明した後、意見交換や新米の試食、倉庫見学をしていただきました。倉庫見学では新米が保管されている低温倉庫へ案内し、温度管理、衛生面、出荷方法の説明を行い、産地での品質管理を確認していただきました。意見交換会では卸の方々から、新米の価格が高値となっているとの説明を受けました。現状、備蓄米やカルローズ米などの外国産米が市場に十分に流通しているため、新米の出荷が停滞気味とのことでした。

JA佐渡管内全域では農薬・化学肥料の使用量を新潟県の慣行栽培と比べて5割減らし、生態系におけるミツバチやトンボをはじめとする生きものに影響を与えるネオニコチノイド系の農薬を使用していません。更に田んぼの畦は除草剤を使用せず雑草を刈り取っています。これらは、田んぼを餌場とする特別天然記念物のトキが暮らしやすい環境をつくる「生きものを育む農法」に取り組んでいるためです。政府は、物価高騰対策としておこめ券配布の推奨を検討していると報道もあります。そういった機会に佐渡米の取り組みを知ってもらい、共感し選んでもらえる輪を少しでも広げられるようにJA佐渡としては、地道に広報活動を続けて参ります。



日常的にトンボが見られる環境に配慮した稲作



主要卸の方々との意見交換会



令和7年産のコシヒカリとこしいぶきの試食評価の様子



島内5カ所ある倉庫のうちの畑野倉庫を見学